

課題名：COVID-19後遺障害に関する実態調査（中等症以上対象）

中間集計報告

研究代表者：日本呼吸器学会理事長/高知大学教授 横山彰仁 **研究分担者：**陳和夫、高松和史、金子猛、小倉高志、迎寛、野出孝一

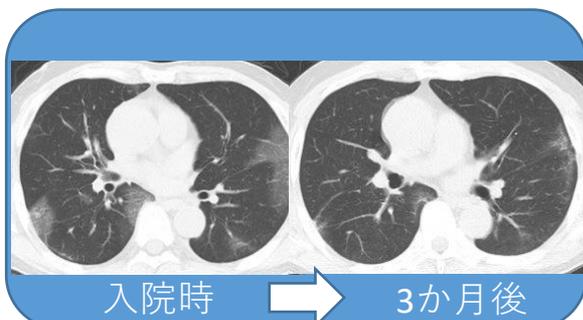
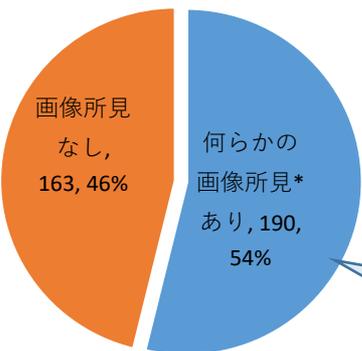
研究目的： 呼吸器感染症であるCOVID-19については、未だ回復後の経過については不明点が多い。本研究では、本国における中等症以上のCOVID-19の、特に呼吸器関連における他覚・自覚症状の遷延（いわゆる後遺症）の実態とその予測因子を把握する。具体的には、① COVID-19回復後の肺CT画像所見、肺機能、及び自覚症状の経過の実態把握、②肺機能の低下やその他の症状の遷延を予測する因子（バイオマーカーを含む）の検索、③心臓への影響調査（潜在性/顕性の心筋炎や心不全）を行う。

対 象： 2020年9月～2021年5月にCOVID-19で入院した967例 ※引き続き前向きに収集予定

※中間報告の対象は、上記中、退院から3か月以上経過した**512例**（男性371例、女性141例、年齢62±13.6歳）

退院3か月後の肺CT画像所見

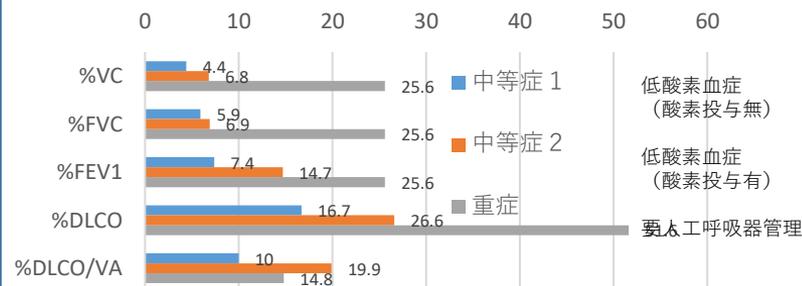
(353例/512例中)



*何らかの画像所見があるとは、すりガラス影、索状影、炎症性変化といった、CT画像上で捉えることのできる肺の変化が見られた場合を指す。

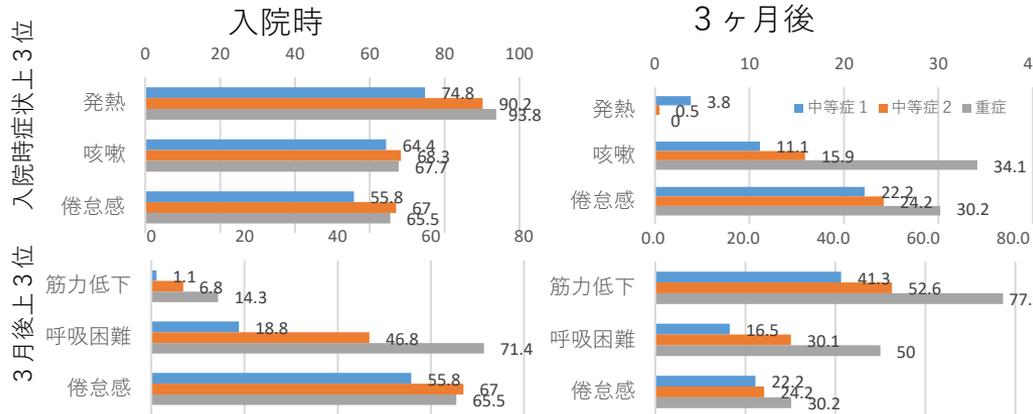
重症度別の肺機能検査結果：

検査値が健康な人の80%未満の値になる割合



* VC:肺活量、FVC：努力肺活量、FEV1：1秒量
DLCO：肺拡散能、VA：肺胞換気量

重症度別入院時症状と3か月後自覚症状の比較、上3位



<退院3か月後の肺CT画像所見（353例/512例中）>

画像所見は遷延することが多い ⇒ 詳細は今後解析予定

（※）肺炎の名残りを示唆する何かしらの画像所見を認めることは現在治療が必要なことは異なる。臨床症状と画像所見は必ずしも一致せず、画像所見の臨床的意義は低い

<肺機能検査>

肺機能低下の遷延の程度は重症度に依存、肺拡散能が障害されやすい

<自覚症状>

発症急性期に多い症状と3ヶ月後に多い症状は傾向が異なる

遷延症状のうち、筋力低下と息苦しさは明確に重症度に依存

<今後の方針>

時間とともに症状の遷延は改善すると想定するが、3か月ごとに調査を継続し経過を明らかにする（本研究が令和4年3月で研究終了後は日本呼吸器学会においてそれぞれの症例について最大1年間観察予定）